

# 沖縄県伊是名村における祝い（スージ）と祝儀

佐藤 奈穂

Nao SATO

## Celebrations and Gift Money in Izena Island, Okinawa

### はじめに

本研究は、沖縄離島地域における“社会に埋め込まれた”経済活動に関する実証研究である。具体的には、沖縄県島尻郡伊是名村を事例とし、離島地域において現在もなお活発に行われている人生の節目の「祝い（スージ）」に関する人々の営みに焦点を当てる。

沖縄の離島地域では、今もなお国家や市場を介さない富の再分配や資源の利用、相互扶助慣行が人びとの暮らしの一つの生存の基盤となっている。そのような沖縄の多様な経済活動の価値とその限界を明らかにするための第一段階として、本稿では、研究の背景および村の概要、そして伊是名村における「祝い（スージ）」の実践の概要を明らかにしていく。

### 1. 研究の背景と目的

第二次世界大戦後、資本主義は世界へと拡大し、経済成長による人びとの生活水準の向上が目指されてきた。1970年代後半以降には、資源の効率的配分を市場の自由競争のもとで実現しようとする新自由主義の考え方が世界的に広まり、競争的市場経済の原理を実現すべく、規制緩和、民営化、金融化、「途上国」に対する構造調整などが遂行された。このような政策的実践下において、この30年の間に世界の就学率は上昇し、貧困ライン以下で暮らす人びとの割合は半減し、科学技術は大きな進歩を遂げてきた。

しかし、市場原理ではカバーできない財やサービス、例えば地球環境の保全や文化の保護、防災・減災、家事労働や育児・介護などの再生産労働における問題の解決は困難となり、個人の自由な決定を最大限に保証するが故に、他人の権利や利益を侵害する危険性が増し、社会的・経済的弱者の生存を脅かすことになった。企業権力はグローバルに拡大し、南北間のみならず一国内での貧富の格差の拡大、自然や文化の破壊を招き、

人びとの社会的韌帯は縮小されてきた。

そのような矛盾と限界を露呈している資本主義に対し、脱成長、連帯経済、ポスト開発、贈与の経済、アグロエコロジー、シェアリング・エコノミーといった異なった名称をもつ多岐にわたる議論が、資本主義に代わる経済体制、あるいは資本主義が抱える問題を解決する方途を模索するという同じ問題意識の連なりで活発化している（本研究では、便宜的にこれらの議論をまとめて「ポスト資本主義論」と呼ぶ）。

ポスト資本主義に関する議論の中でもセルジュ・ラトゥーシュを主な論客とする「脱成長論」は、資本主義からの脱却を命題として、経済成長を減少させる必要性とその方途を大局的な視点から倫理的実践的に論じ、注目されている（ラトゥーシュ 2013）（Nakano 2011）。しかし、脱成長論に対する批判や疑義の声も少なくない。それは、複雑な現実に対して、一概に経済成長や経済合理主義を否定することは妥当なのか、所得向上を切望する貧困層は経済の停滞を望まないのではないのか、また、現実社会の複雑な構造、ダイナミズムを分析するには至っていない、といったものである（真崎 2015）。このような批判を受けるのは、脱成長論が地域の実態から脱成長社会の在り方を模索する帰納的なアプローチに欠け、机上の理想論にとどまっているためである。

元来、人は独立して存在するものではなく、そのベースにはコミュニティが存在し、コミュニティの基盤には「自然」が存在する。自然は食料やエネルギーの源であり、自然があってこそコミュニティや個人の存続が可能となる。しかし、近代化の過程において、本来、有限であるはずの自然資源を無限であると認識し、個人の利益追求は集団の富を拡大するものとして推奨されるようになった。人は自然の領域を強力にコントロールしながらそこから離陸し、そして個人はコミュニティから独立し、経済的利益を追求する道を進んできたのである（広井 2015）。

一方、ここで取り上げるかつて琉球王国だった沖縄では、生産と労働を中心とする近代国家体制が政府による「上からの」近代化によって導入されてきた。そのため、在来社会において近代経済学をベースとした価値観は絶対的なものではなく、それを相対化するような多様な価値観が人びとの中に存在し、国家や市場を介さない富の再分配や資源の利用、相互扶助慣行が今もなお人びとの暮らしの生存の基盤となっている。市場経済だけではない、地域の文化や自然を踏まえた社会に埋め込まれた多元的な経済が、固有の地域経済を創り上げてきたのである。

人と人を結び、互いを支える慣行がいかに成立しているのか、それを可能とする自然環境や文化、制度、またそれらが維持されるメカニズムはいかなるものなのか。市場経済だけではない多元的な経済活動の実践を明らかにし、現代の資本主義経済を相対化する在来社会の価値とその限界を実証的に考察することは、脱成長論をはじめとするポス

ト資本主義論にも大きな示唆を与えるだろう。

日本という巨大な資本主義市場の一部に位置付けられているにもかかわらず、沖縄は現代においても独自の再分配や相互扶助の慣習を維持している。しかし一方で、そのような固有の慣習を色濃く残す離島地域は概ね人口減少傾向にあり、それらの慣習のあり方に今後も影響を与え続けるだろう。また、慣習を支える社会のあり方が人口の減少を招いている一因であることも考える。本研究では、在来の慣習や制度と市場経済を兼ねあわせた多元的経済の実践の価値を評価すると同時に、その限界を明らかにしていきたい。

## 2. 沖縄における社会に埋め込まれた経済

沖縄における独自の市場外の経済活動として、これまで焦点が当てられてきた事象には、主に生活協同組合的組織の「共同売店」、そして互助的な金融システムの「模合」がある。

共同売店は地域によって「共同店」「共同組合」「協同組合」などと呼ばれ、主に小売店における購買事業を中心とした、いわゆる生活協同組合的組織である。基本的には部落（字）を単位として住民の共同出資によって運営される（宮城 2004：15）。

最初の共同売店は、1906年（明治39年）に沖縄県北部山原地方に設立された奥共同売店である。奥集落では、共同売店の設立によって、地域自ら林産資源の出荷と生活物資の調達を行うようになる。林産資源の販売によって利益が大きくなると、製茶工場、精米所、酒造工場などを運営するようになり、「地域の総合的な事業体」として成長していく。さらには金融業、奨学金や電話取次なども手がけるようになり、「地域のコミュニティ企業体」へと進化していった。このような奥共同店の成功に触発され、本島北部全体に共同売店が設立され、その後、離島地域を含め沖縄県全体に広がった（関 2015）。概ね1980年代初期までは、集落の経済機能、福祉機能さらには地元住民の情報交換の場として重要な意味を持っていたが、1990年代中期以降、コンビニエンスストアや大型ショッピングセンターの進出により、共同売店は減少していった。しかし、現在も沖縄本島北部地域、伊是名島、伊平屋島等の離島には細々と経営を続ける共同売店が残っており、僻地に暮らす高齢者の生活を支えるものとして、その存在意義が見直されている（関 2015）（宮城 2004、2009）。戦前、戦後の沖縄の地域経済、そして地域の人々の生活を支え、人々を結びつけ、助け合うための生活の基盤であったと言える。このように独自の発展を遂げてきた共同売店は、社会学、経済学、経営学と各方面からの研究蓄積がある。

そして「模合」とは、日本の他の地域では頼母子講や無尽と呼ばれる経済的な互助的

金融の活動および組織を指す。その仕組みは、集まったメンバーが一定の金額を定期的に出し合い、その総額をメンバーの1人が順番に受領するというものである。その歴史は古く、琉球王国時代から存在したと言われるが、現代においても沖縄全土で活発に行われている。現代の模合は、参加メンバーの親睦を目的とした「親睦模合」と資金調達や貯蓄を目的とした「金融模合」の2つに分けられる（波平 2008）。また、利子を徴収しない模合を「助け合い模合」と呼び、利子を取るものと区別される。

模合に関する研究は、経営学、社会学、人類学、開発経済学、経済史など多分野において非常に厚い蓄積があるが、度々その互助的機能が指摘されてきた。例えば、現代の那覇で広く実施される親睦模合について平野（2014）は、「ただの飲み会」といわれることも多い那覇周辺地域の模合も、沖縄の歴史のなかで果たしてきた相互扶助的役割を、親睦仲間という小さな共同体の中で果たしていることを明らかにしている。

一方、本研究で焦点を当てるのは、人生の節目の「祝い（スージ）」に関する人々の営みである。沖縄の特に離島地域において現代においても盛大に執り行われているにもかかわらず、先行研究は管見の限りほとんど見当たらない。島の人々の人生の節目の祝いには100人単位の人が自宅を訪れ、祝う。そして祝儀が渡される。ここでは、その「祝い（スージ）」を沖縄離島地域の多元的な経済活動の1つとして焦点を当てる。

### 3. 調査対象地と調査の概要

#### (1) 伊是名村の概要

調査対象地は沖縄県北西部に位置する沖縄県島尻郡伊是名村である（図1）。

伊是名村の総面積は15.44平方キロメートルで、主島伊是名島のほか、屋那覇島、具志川島、降神島の三つの無人島からなる。村の人々が暮らす伊是名島の総面積は14.16平方キロメートルで、島の中央部は北西から東南に島を斜めに切るように百メートル前後の山がほぼ一直線に連なり、帯状の高地をなしている。その高地から海岸線に向かってなだらかな勾配の土地が延び、そこに耕作地が展開している（伊是名村史編集委員会 1989：2）。伊是名島の東部には諸見と仲田、南部に伊是名、西部に勢理客、北部に内花の5つの集落があり、2021年11月30日現在の人口は1,316人（男性704人、女性612人）、世帯数は721世帯である（伊是名村 2022）。島は古くから水資源が豊富で耕地にも恵まれ、米所としても名を馳せてきた。現在は、稲作やサトウキビ栽培をはじめとした農業、漁業、もずくや海ぶどうの養殖業、製糖業、観光業などを主な生業としている。

以下、本稿で用いる「シマ」とは、伊是名村を指すこととする。沖縄方言の「シマ」は、文字通り「島」を意味するばかりでなく、村落をも意味する概念である。伊是名の人々が帰属意識を有する伊是名村を「シマ」として記していく。



図1. 伊是名村地図  
(出典) 2016年伊是名村勢要覧

## (2) 伊是名村の人口推移

伊是名村の人口は1955年をピークに1975年にかけて急激に減少し、その後、現在に至るまでゆるやかな減少傾向が続いている。1955年の人口は5,689人であるのに対し、2020年では1,322人と、ピーク時に比べると約23パーセントを占めるにすぎない。

65歳以上人口が総人口に占める割合は高まる傾向にあり、1980年には全人口の17.5パーセントであったのが、2020年では30.9パーセントを占めている（図2）。2020年の全国の総人口に占める65歳以上の人口の割合は、28.7パーセントであり、それを若干上回る結果となっている。一方、15歳未満人口が総人口に占める割合は減少傾向にあり、

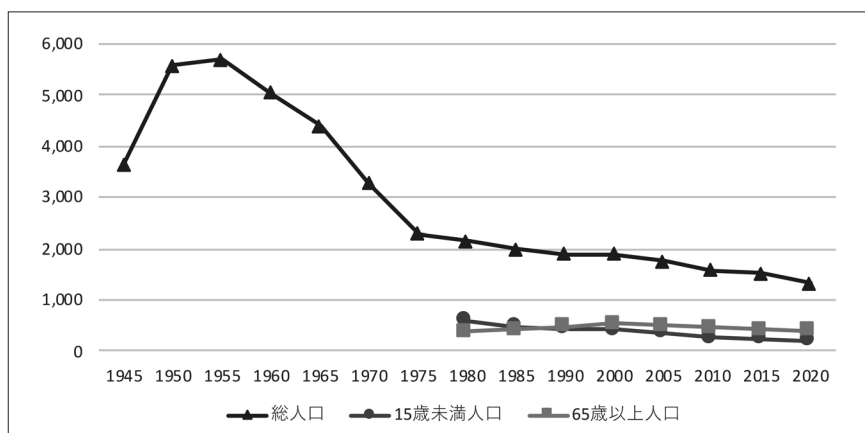


図2. 伊是名村の人口推移  
(出所) 「国勢調査」より筆者作成



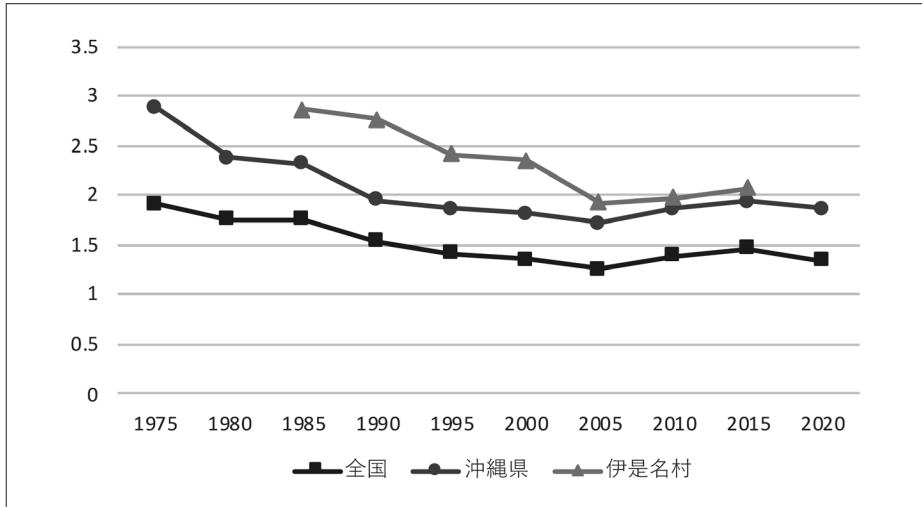


図3. 合計特殊出生率の推移  
(出所) 厚生労働省「人口動態保健所・市区町村別統計」「人口動態統計」より筆者作成

1980年に27.6パーセントであったのが、2020年には15.7パーセントとなっている。

このような人口減少の傾向にある伊是名村であるが、古くから「子宝の島」として知られてきた。1人の女性が生涯に産むと見込まれる子どもの数を示す合計特殊出生率を日本全国および沖縄県全体とで比較してみると、沖縄県の合計特殊出生率は全国のそれよりも常に高い値を示しているが、伊是名村では、さらに高い値を維持している(図3)。1985年時点では、全国の合計特殊出生率は1.76と人口置換水準を大きく下回っていたのに対し、沖縄県で2.31、伊是名村ではさらに高い2.86と、人口増加が生じる値を示している<sup>1</sup>。沖縄県全体の動向もまた、2015年時点では、全国が1.46であるのに対し、沖縄県は1.94、伊是名村は2.07と2005年頃の下降からややもち直し、人口置換水準と同程度の値を示している。

人口置換水準よりも高い出生率を示す傾向があるにもかかわらず人口減少が進む理由は、少子化による自然動態に加え、村外への転出による社会動態の影響が大きいと言えるだろう。

### (3) 伊是名村での就学

伊是名村には、村立の小学校および中学校が各一校ある。村内には高校はなく、高校に進学するにはシマを離れ、本島などに住居を移して就学する必要がある。小学校の児童

<sup>1</sup> 2022年現在の人口置換水準は、概ね2.07である(厚生労働省「人口動態統計」)。

数は1962年の1,099人をピークに、1975年頃にかけて激減し、2021年現在では児童数91名とピーク時の1割未満となっている（伊是名村 2010）（文部科学省「学校基本調査」）。

#### (4) 調査の概要

調査期間は2021年12月17日から2021年12月19日、および2022年3月24日から26日である。伊是名村の仲田集落、諸見集落および伊是名集落の個人宅において、インタビュー調査を実施した。

### 4. 伊是名島の主な祝い（スージ）と祝儀

#### (1) 祝儀を伴う祝い（スージ）

沖縄には古くから受け継がれてきた多くの儀礼や祝い事が、今もなお人々の生活に生きている。本稿では、数多くある行事の中でも、世帯外の複数の人々との間で祝儀のやりとりを伴う人生の節目を祝う行事に焦点を当てる。シマで行われる人生の節目に関わる祝い事は数多くあるが、家族内にとどまらず親族や知人を含めた大勢の人が祝いに関わる行事は主に、出産祝い（クワナスージ）、そして小学校入学（ミーンジ）、高校合格、結婚（ニービチ）が挙げられる。そして生年祝い（トゥシビー）として、還暦（ルクジューチヌユーエー）、七十三祝い（ナナジュースンヌユーエー）、八十五祝い（ハチジュウグヌユーエー）、88歳を祝うトーカチ、そして97歳を祝うカジマヤーがある。

小学校の入学祝いの場合には入学式の当日、高校合格祝いは高校の合格発表日に各々の家で祝い（スージ）が開催される。生年祝い（トゥシビー）は主に元旦に開催されるが、還暦や七十三祝いは家族や近い親族だけで、那覇をはじめとする沖縄本島のホテル等で開催するか、家族旅行に出かけるなど、小規模に祝うケースが増えてきている。一方、88歳を祝うトーカチ、97歳を祝うカジマヤーは今も盛大に実施される。それぞれ旧暦の8月8日、9月7日に実施される。これらの祝い（スージ）も、シマの各々の家で行われてきたが、近年では那覇をはじめとする沖縄本島のホテル等での開催も増えてきている。また、結婚式も以前は村内で行われていたが、現在は村内で式が挙げられることはなく、主に本島のホテルや結婚式場で催されている。

#### (2) 出産と年齢に関する祝い（スージ）

「産し繁盛（ナシハンジョウ）」と、子供が生まれることでますます家が栄えると言われる沖縄では、特に出産に関する儀礼が盛んに行われてきた。自宅でお産が行われていた時代には、シマでは生まれた日のハーウリー（井下り）から始まり、満1歳の誕生日であるタンカヌ祝まで、実に7から8つの儀礼が行われてきた（伊是名村史編集委員会、

1989)。しかし、1972年の本土復帰以降、本島の病院での出産への移行が進み、シマでの出産と島外での出産数は1975年に逆転し、1982年以降は原則的にシマでの出産は行われなくなった（伊是名村史編集委員会 1989：394）。それと共に、出産時や出産直後の儀礼はなくなり、現在では島外の病院で出産を終え、シマへ母子が戻った後に、出産祝いが行われている。

また、沖縄では自分の生まれた年と同じ十二支の年を「生まれ年」といい、その年の正月に無病息災を火の神（ヒヌカン）と祖先（トートーメー）に願い、お祝いをする。この祝いは「トゥシビー」と呼ばれる。生まれ年は12年ごとに回ってくるため、13歳、25歳、37歳、49歳、61歳、73歳、85歳、97歳がその対象となる。もともとはその年齢を「厄年」とする考え方があり、災難を無事に切り抜けられるように願い立てをする意味合いがあったとされる。しかし、現在では長寿を祝う意味合いが強くなり、主に「還暦祝い」である61歳以上の対象年に親族や友人、知人を集めた祝い（スージ）が行われる。また、本土の米寿にあたる88歳を祝うトーカチは、17世紀以降に薩摩より伝えられたと言われているが、盛大に催される祝い（スージ）の1つとなっている（座間味 2009：48-76）。

### (3) 祝儀

これらの祝いには、祝儀が伴う。本土での祝儀と同様に、祝儀袋にお金を入れて、祝う相手へ手渡される。第二次世界大戦後、全国的に展開された「新生活運動」により、合理的・民主的な生活習慣の確立などが各地域で呼びかけられた（田中 1990：210-211）。沖縄でも新生活推進運動協議会が設立され、生活習慣の合理化の一環として、冠婚葬祭の簡略化などが謳われ、その活動の一部は現在まで続いている。特に、祝儀や香典の上限は各村で設定され、現在においても上限を超えないことが推奨されている。伊是名村でも、新生活運動により冠婚葬祭の簡素化が進められ、祝儀は一律2,000円、香典は一律1,000円と上限額が現在でも設定されている。そのため、シマで販売されている祝儀袋には「2,000円」という金額と「新生活実践運動」「みんなで守り、住みよい村づくり」「伊是名村新生活推進協議会」というスタンプが押されているものがある。また、香典袋には「1,000円」という金額とその他、祝儀袋と同様の文言のスタンプが押されている（写真1）。

しかし実際のところ、シマでは金額の上限は厳密には守られていない。親族関係の近さや親交の深さによっては、定められた額の祝儀や香典では「不十分」であり、新生活実践運動のハンコの押されていない袋に、定額を上回る任意の金額を入れて手渡される。沖縄県の他の離島では、祝儀や香典の上限が厳密に守られている地域もある。しか





写真 1. 金額がスタンプされている祝儀袋と香典袋  
(出所) 筆者撮影

し、シマの人々は、「定額を守ることで確かに出費を抑えることはできるが、それでは自分たちの本来の気持ちは伝えられず、シマの交際は成り立たない」と言う。新生活実践運動により定められている金額は、それを上回ること、関係の深さや相手への配慮の大きさを表現する1つの基準となり、“お付き合い程度”の相手には、「定められている金額だから、これ以上は出さなくてよい」という弁明や手渡される金額の根拠を示す役割を果たしていると言えるだろう。

また、祝儀は既婚者の場合、主に夫婦を単位として、未婚者の場合は個人を単位とし、自身の交際の範囲に合わせてやりとりが行われている。

#### (4) 祝い（スージ）当日の実践

祝い（スージ）が自宅で実施される出産祝いや小学校入学、高校合格祝いでは、夕方17時ごろから人々が祝儀を渡しに各家を訪問し始める。祝いに訪れる人に対して食事と酒などの飲み物が振る舞われる。小学校入学や高校合格祝いでは、シマの複数の子どもが祝いの対象となり、すべての子どもに祝儀を渡すケースもあれば、親交のある世帯の子ども数名のみに渡すケースもある。すべての家で食事が振舞われるため、夫婦の場合は二人で手分けをして各々の家を訪問したり、親交の深さに応じて、祝儀をひとに預けたり、家の中には上がらず、祝儀を渡し、挨拶だけで済ませたりと臨機応変に家々を回る。

祝い（スージ）を催す側は、前日から準備に追われる。200人前後の人が訪れるため、

準備や当日、片付けには親族などが手伝いに来る。野菜や魚など、食事の準備のための材料の一部は親戚や近隣の人から届けられる。また、祝儀に対する返礼は、出産祝いでは主にタオルなどの粗品が渡されるが、小学校入学祝い、高校合格祝いでは、返礼は準備されないのが一般的である。

#### (5) 祝い（スージ）と祝儀の事例

ここでは一組の夫婦の事例を概観したい。夫（61歳・男性）は、伊是名島出身で、同じく伊是名島出身の妻（60歳）と二人暮らしである。すでに成人した子ども2人、長女と長男はそれぞれ沖縄本島、沖縄県外に居住している。

夫婦は、結婚以降に受け取った祝儀の記録をつけている。祝儀のやりとりを伴うすべての事柄の記録が残されているわけではないが、祝儀のやりとりがどのような場合に実施され、そのやりとりの範囲がどの程度のものなのかを伺い知ることができる。記録のある項目は以下の通りである。

夫婦の「結婚」祝いに続いて、「長女出産」「長男出産」、「長女の小学校入学」、「長男の小学校入学」、そして「長女十三祝い」「長男十三祝い」、「長女の高校合格」「長男の高校合格」「長女の大学合格」「長女の成人」と続く。また、「長女の小学校6年生の県外研修」「長男の小学校6年生の県外研修」「長男の中学修学旅行」「長女の中学海外ホームステイ」という長女と長男の学業に関する県外、海外の研修の項目もある。また夫婦の人生の節目に関する項目としては「夫の四十九祝い」「妻の還暦」「夫の還暦」がある。また、人生の節目以外の項目では「不動産の購入」がある。

これらの内、親族以外の大勢の人々から祝儀を受け取っている事柄は、前述の通り「結婚」「出産」と「小学校入学」「高校合格」「還暦」である。その他の「十三祝い」「成人」「学業における研修」「四十九祝い」「不動産の購入」は10名から30名程度の主に近い親族から祝儀を受け取っている<sup>2</sup>。また、「還暦」については、近い親族のみで小規模に祝うことが多く、この夫婦も親族に加えて、親しい友人、知人からのみ祝儀を受け取っている。

ここではさらに、自宅で祝い（スージ）が催された「出産」「小学校入学」「高校合格」における祝儀の相場と祝儀を渡した人数について詳しくみていきたい。

1994年の長女の出産祝いの内容をみると、1人から受け取った金額は、親交の深さや関係性、親族関係の近さにより異なり、2,000円、3,000円、5,000円、10,000円と幅がある。総勢177名から総額746,000円を受け取っている。また、1996年の長男の出産祝

<sup>2</sup> 高い出生率を保ってきた伊是名村では、祖父母やオジオバ、イトコといった近い親族だけで数十名になるのは珍しいことではない。

いでは、総勢204名から総額1,117,000円を受け取っている。

また、2001年の長女の小学校入学祝いでは、1人から受け取った金額は出産祝いと同様に、2,000円、3,000円、5,000円、10,000円と幅があるが、総勢177名から523,000円、2003年の長男の小学校入学祝いでは、総勢188名から575,000円を受け取っている。

そして、2010年の長女の高校合格祝いでは、総勢242人から720,000円、2012年の長男の高校合格祝いでは、234人から624,000円を受け取っている。

表1. 出産・小学校入学・高校入学時の祝儀額と人数

	祝儀額 (円)	1,000	2,000	3,000	5,000	10,000	20,000	合計人数 (人)	合計額 (円)
長女出産	人数 (人)	0	22	74	66	15	0	177	746,000
	(%)	0	12.4	41.8	37.3	8.5	0	100	
長男出産	人数 (人)	0	12	89	84	19	0	204	1,117,000
	(%)	0	5.9	43.6	41.2	9.3	0	100	
長女小学校入学	人数 (人)	0	81	72	19	5	0	177	523,000
	(%)	0	45.8	40.7	10.7	2.8	0	100	
長男小学校入学	人数 (人)	0	89	74	17	7	1	188	575,000
	(%)	0	47.3	39.4	9.0	3.7	0.5	100	
長女高校合格	人数 (人)	3	162	46	15	14	2	242	720,000
	(%)	1.2	66.9	19.0	6.2	5.8	0.8	100	
長男高校合格	人数 (人)	0	170	38	18	8	0	234	624,000
	(%)	0	72.6	16.2	7.7	3.4	0	100	

(出所) 筆者作成

出産祝いでは、祝儀の定額である2,000円を上回る額を渡す人の割合が高い一方、小学校入学では定額の2,000円の割合が多く、全体の半数近くを占める。また、高校合格祝いでは定額の2,000円が渡されるケースが7割近くを占める。出産祝いと入学祝いの祝儀額の差は、シマの人々にとっての“めでたさの度合い”と、祝う側の人々の出費に関係していると考えられる。例えば、長女の小学校入学時には28名の子どもが同時に入学した。新一年生28名のうち、何名の子どもに対して祝儀を渡すかは、それぞれの際限範囲によって異なるが、同日中に複数の祝儀が必要となり、まとまった出費となる。そのため、一人当たりに手渡される額が抑えられることが考えられる。

また、高校の合格が最も広範な人々から祝われる傾向がみられ、2010年の長女の高校合格祝いを例にとると、当時の世帯数は779世帯であり、実に全世帯の約3分の1の世帯から祝儀が渡されたことになる。また、これらすべての祝い（スージ）について、食事や飲み物の提供、返礼などの費用を差し引いても、まとまった金額が手元に残るといえる。祝儀をもらった相手には、相手の祝い（スージ）の際に必ず同程度の祝儀を渡す。この夫婦は記録をつけることで、受け取った相手と金額を正確に把握し、それをもとに祝儀のやりとりを行なっている。

このような祝儀のやりとりについてシマの人々は、シマの「交際」であり「助け合い」だと説明する。誰が誰と結婚し、子どもが何人いて、それぞれの子が何歳になったのか、

互いにその成長を共有し、年配者には敬意をもってシマを挙げて長寿を祝う。祝い（スージ）は、互いの人生を共有する機会であり、互いに家を訪問し、語り合う場となる。そして、出産や島外への進学など、まとまった費用が必要となる人生の節目の出費を互いに補い合う役割を担う。先ほどの長女の高校合格祝いの例を挙げると、24名の高校合格者に対し、同じように祝儀が渡されたと仮定すると、1日で1,700万円ほどの金額がシマの中で動いたことになる。人生の節目における出費に対し、個々の家計が独立して対応するのではなく、交際範囲の中で資金を移動させることで、その一部を補っているのである。

## 結語

本稿では、沖縄の離島地域、伊是名村で行われている人生の節目の「祝い（スージ）」に関する調査、分析を、ポスト資本主義社会に向けての多元的経済の実証研究として展開していくことの概略を述べた。また、祝い（スージ）における祝儀のやりとりの概略と1つの世帯を対象にその金額や交際の範囲を明らかにした。シマを挙げて行われる祝い（スージ）には、出産祝い、小学校入学祝い、高校合格祝いがあり、特に子どもが生まれ育ったシマを離れる高校合格祝いは、広範囲な人々の関わりの中で執り行われる。また、長寿を祝う88歳（トーカチ）、97歳（カジマヤー）もシマを挙げて開催されている。それらの祝い（スージ）には、祝儀が伴い、個々の家計を超えた広範な金銭のやりとりが行われていることが明らかになった。

祝い（スージ）はシマの人々の交流の場であり、子どもの成長を皆で見守り、多くの人々と人生の節目を共有する機会である。人々の節目を地域で祝い、祝儀は各々の家計におけるまとまった出費の足しになる。ライフステージを異にする人々が、互いに祝儀を出すことで長期的な受け取りと返礼が繰り返され、継続的なシマ全体の営みとなっているのである。祝い（スージ）は、島の人と人とを結ぶ基盤を形成しているとも言えるだろう。

本稿で分析対象としたのは、非常に限られた事例であるため、本分析から伊是名村全体の傾向を把握することは難しい。しかし、どのような時に祝い（スージ）が実施されるのか、その概要を把握し、祝い（スージ）の当日には、シマを挙げて人々が祝いの席に顔を出し、多額の祝儀がシマの中で動く様子を伺い知ることができた。

今後はさらに事例数を増やし、シマ全体の祝い（スージ）と祝儀の傾向を把握し、その意義と限界についての調査、分析を進めていく。また同時に、シマの人々が共有する「社会規範」への理解も深めていきたい。祝い（スージ）の場で行われる贈与交換としての営みは、社会関係を円滑にする潤滑油である一方、社会規範を伴うことにより社会

関係を“煩わしい”ものになっている可能性はシマの事例でも考えられる。祝儀のやり取りによる返礼の義務や、共食における人々にかかる負担や求められる役割を含めて、島の人々による祝い（スージ）に関する営みについて分析を深めていきたい。

## 参考文献

- 伊是名村 2010.『伊是名村後期次世代育成支援行動計画（ときわのしま・こどもプラン）平成22～26年度』沖縄県伊是名村.
- 伊是名村 2022.『広報いぜな 令和4年1月号（No.609）』伊是名村総務課.
- 伊是名村史編集委員会 1989.『伊是名村史 下巻 島の民俗と生活』伊是名村.
- 座間味栄議 2009.『沖縄祝い事便利帳』むぎ社.
- 関満博 2015.『中山間地域の「買い物弱者」を支える：移動販売・買い物代行・送迎バス・店舗設置』新評論.
- 田中宣一 1990.「生活改善諸活動と民俗の変化」成城大学民俗学研究所（編）『昭和期山村の民俗変化』名著出版. 203-237ページ所収.
- 波平勇夫 2008.「宮古の模合」宮古の自然と文化を考える会（編）『宮古の自然と文化 第2集』ボーダーインク. 136-121ページ所収.
- 平野（野元）美佐 2014.「親睦模合と相互扶助—沖縄・那覇周辺地域における模合の事例から—」『生活学論叢』26：3-16.
- 広井良典 2015.『ポスト資本主義—科学・人間・社会の未来』岩波新書.
- 真崎克彦 2015.「脱成長論の意義と課題 —文明論として、実践理論として—」『国際開発研究』24(2)：21-33.
- 宮城能彦 2004.「共同売店から見えてくる沖縄村落の現在」『村落社会研究』11(1)：13-24.
- 2009.『共同売店—ふるさとを守るための沖縄の知恵—』沖縄大学地域研究所.
- ラトゥーシュ、セルジュ 2013.『〈脱成長〉は、世界を変えられるか？—贈与・幸福・自律の新たな社会へ』中野佳裕（訳）. 作品社.
- Nakano, Yoshihiro 2011. De-Growth, or Questions of Subjectivity in Reconstructing Local Autonomy: The Case of Minamata's Environmental Politics, 『社会科学ジャーナル』72：119-143.